

芦屋大学論叢 第82号  
(令和6年7月29日)抜刷

《研究ノート》

加藤歓一郎の青春と葛藤

－大正期松江市の師範学校と高等学校を背景として－

三 羽 光 彦



## 《研究ノート》

### 加藤歓一郎の青春と葛藤

—大正期松江市の師範学校と高等学校を背景として—

さん ば  
三 羽 光 彦

芦屋大学臨床教育学部特任教授

#### はじめに

戦前から戦後にかけて島根県奥出雲の地に優れた教育家がいた。「日登教育」での知られた加藤歓一郎（1905-1978）である。戦後直後、大原郡日登村の日登中学校校長として生産教育と生活綴方教育を統合した独自の教育をすすめ、1950年代には文集『ひのぼりの子』の作文が注目され、「山陰のやまびこ学校」・「日登教育」として全国に知られた。かつての日登村は、現在の雲南市木次町東日登・西日登・寺領・宇谷の地域であり、松江市の宍道駅から広島県に至るJR木次線の日登駅を中心とする山あいの村であった。この地域は奥出雲と呼ばれている。

小原國芳編『日本新教育百年史』では、「日登教育」と加藤歓一郎について、「日登中学校の生活教育」と題した項目で、2頁ほどを費やして記述されている。まず「日登教育」についてみてみよう。

「戦後の新教育運動は、主として都市部において教育課程の自主的編制の立場からとりあげられたものが多くた。これに対し、生活綴方的発想から純農村を背景としての教育運動も、大きな底力をもって生まれ出る傾向が芽生えていた。その最も代表的なものとして、生活綴方の発想により、地から生え抜いたといつても過言ではない教育に、大原郡木次町立日登中学校の教育がある。」<sup>1)</sup>

そして具体的には、「コミュニティスクールの原理を研究し、郷土に根をおろした教育を実施するためにまず郷土調査から始め、学校経営には新しい社会科を中心とし、職業・家庭科を一体化した地域社会学校として、働きながら学び、生産しつつ学ぶという『全人教育』の形態をとった。このことは村の産業開発との関連が生じたので、青年学級および公民館活動を通じての成人学級を設けた。」<sup>2)</sup>と記している。

神戸大学元教授（哲学、教育学）の森信三は、加藤歓一郎の実践について、無着成恭、小西健二郎、東井義雄の3人の著名な生活綴方教師と比較して、それらにも増して優れた実践であると評価している。加藤の実践は端的にいえば、「生産教育と生活綴方とを切り結ばせたもの」であって、生活綴方の内部にとどまつた3人の実践とは「次元が一段上」で、「これだけの偉業を為しとげた人は、戦後の日本教育界に、先ずはあるまい」<sup>3)</sup>とまで述べている。森信三が加藤歓一郎と旧知の仲であったことや、発言の場が日登中学校であったことを差し引いても、決して間違った評価ではないと思われる。

加藤には『やまびこ学校』『学級革命』『村を育てる学力』などのジャーナリズムを動かすような著書がなかった。しかし、一貫して島根県奥出雲の地域で学校教育や社会教育に打ち込み、「地の塩」を育てる教育に打ち込んだ。森信三は、「わが国のジャーナリズムは、とかくハデ好みでありまして、無着氏の『やまびこ学校』は空前の反響を呼び起しても、加藤さんのこのような歴史的偉業については、ひとりジャーナリズムが取り上げないばかりか、学者思想家なども、まだ十分に気づかずにいるような有様」<sup>4)</sup>だと批判している。森がこのように論じたのが1959年のことであったが、現在の教育学界でも、加藤歓一郎の名前と仕

事については、まだまだよく知られていない。

しかし、奥出雲の地では、加藤歓一郎の教育と思想は教え子を中心に受け継がれ、2006年8月に加藤歓一郎遺徳顕彰会が設立され、加藤の蔵書や関係資料を保管する「加藤歓一郎顕彰資料室」が、旧日登中学校跡に建つ日登公民館（現・雲南市日登交流センター）内に開設した。その間、地元関係者から資料の提供を受けた福原宣明（横浜市立中学校元教諭）が、加藤の伝記である大著『魂の点火者』（上巻：1994年、下巻1998年、報光社）を上梓した。そして、最近では、櫻井重康（元大阪府立高等学校教諭、同志社大学人文科学研究所元嘱託研究員）による資料集『加藤歓一郎の軌跡－1947～75年』（2019年3月改訂版、同志社大学人文科学研究所発行。同年4月、（社）文化政策・まちづくり大学校から改訂版発行）の完成や、櫻井による日登村の「地域づくりの教育」の考察が進められるなど<sup>5)</sup>、加藤歓一郎の研究もしだいに進められるようになった。

さて後に述べるように、加藤歓一郎の思想と実践は、生涯を通して、時代の圧力と闘い波乱に満ちた曲折したものであった。しかし、常に地域に根差し社会をリードし青年たちに多大な影響を与えていた。本稿は、加藤歓一郎の曲折した思想的歩み、特に戦中から戦後直後のそれを明らかにするとともに、大正期松江市の師範学校と高等学校の教育を背景として、青年期の彼の葛藤と苦悩を考察するものである。その教育者としての加藤の信念を形作った原点ともいえるのが、加藤の島根県師範学校時代における思想上の葛藤と苦悩ではなかつたかと考えるからである。

## I. 加藤歓一郎の生涯 – その思想と実践

### 1. キリスト者としての加藤歓一郎

加藤歓一郎は、出雲の地では優れた教育者としてだけでなく、敬虔なクリスチヤンとしてよく知られている。戦前は日本アライアンス教会（プロテスタント系団体で、中国地方を中心に約40の教会・伝道所をもつ）の信者として、また戦後は無教会派のクリスチヤンとして、プロテスタンティズムの信仰と伝道に挺身した。『日本キリスト教歴史大辞典』は、彼の戦前の信仰について、「教員生活のかたわら木次、大東、加茂の各地で熱心に伝道に当たった。31年木次町で彼を中心に数十名の信徒が熱狂的ともいえる出雲リバイヴァイヴァルを開催。その間、度々神社参拝拒否、宿直室伝道などをしたため圧迫を加えられたが屈しなかった」<sup>6)</sup>と記述している。また戦後の信仰については、「戦後、46年より、無教会主義の信仰に立ち、家庭を開放し青年のための集会を持つとともに木次町で伝道集会を続けた」<sup>7)</sup>とある。

加藤は昭和初期（1920年代後半から30年代前半）に、大原郡内で日本アライアンス教会の伝道活動を熱心に展開したが、そのころの小学校教師としての教育観について次のように回想している。「信仰に進むに従って、信仰指導的立場になり伝道にも励むようになった。伝道に熱心になるに従って、大伝道者の伝記等に刺激されそれが教育にも熱心にならせ、特に児童愛に燃えるようになった」<sup>8)</sup>。加藤歓一郎の教育の根底には、このプロテスタントとしての強い信仰心があったのである。

この強烈な信仰心に導かれた加藤はしばしば行政当局と対立した。ついに1933（昭和8）年8月、島根県学務課から出頭命令を受け、このままキリスト教伝道に携わるなら退職するよう勧告された。しかし、加藤は退職への道は選ばず、帝国憲法下においても信教の自由が保障されることを主張してゆづらなかった。<sup>9)</sup>その一方でより一層教育実践に邁進することで、「教育界で異端者視」<sup>10)</sup>されている状況を乗り越える方向をめざした。

## 2. 国家主義的教育思想の深化

そのころ彼がまとめた教育論文が残っている。「私の学級経営」である。その文書の冒頭には、「一、本学年初頭に於ける私の感想」と題して、自己の宗教観と教育観が述べられている。加藤は、それまで今一つ教育に邁進することができず、教育を世俗的な営みとしてどこかで距離を置いていた。それを反省し、「この極端なる現実否定の後、私の前には教育を通して永遠の世界に生きる一道が開かれた」、「敢へて現実を否定しても永遠に生きんとして来た私だ。これこそ使命、私の信仰生活とはこの使命に生きることだ。私はこゝにおいて私の教育と信仰の一致を得た」、「教育の事は全人格と全人格との火花である、誰かゞ全生命を捧げることなしには行われまじき大事業である」<sup>11)</sup> と述べている。

そしてその翌年の6月には、西日登尋常小学校で公開授業・研究発表会がもたれたが、それは加藤の教師としての資質をみるためにもあった。そこで公表したのが「地域社会教育思想より見たる学級経営の中心問題」(1935年6月)であった。この論文は、まずフェルディナント・テンニースの理論(*Gemeinschaft und Gesellschaft*, 1887)を下地にして、その「社会」の意味を論じることから進めている。教育は「社会的人格の陶冶」であると定義し、学校・学級はそのための「理想的な生活場」「理想的社会」であるととらえている。日本社会については、皇室中心の家族国家であって「立派な協同社会」であるが、それにもかわらず、近年は「欧米の利益社会的精神」によって、日本の「国家社会の精神」が「大破産」に瀕しているととらえ。今こそ「協同社会精神を益々發揮せしむべき時機」<sup>12)</sup>だと主張している。つづけてドイツ新教育運動の一環として進められていた協同社会学校の取り組みや、広瀬淡窓などの日本の伝統的塾教育を紹介しながら、「協同社会学級」という学級経営方針を提示している。その要点は以下のようである。

第一に、学級は「成員相互も共喜共憂の靈的融合をなす共存関係」にあること、第二に、学級は「全体的有機的な結合」であること、第三に、「教師は国家精神と国家意志」を体現すると同時に、「自己を棄てゝ児童に献身」する「教育愛を指導の根源」とすること、第四に、学級はそれ自身が発展する「陶冶的協同社会」であるべきこと、そのためには「級風、級精神の振作」が必要なことをあげている。総じて国家主義的、全体主義的な教育論が展開されている<sup>13)</sup>。

## 3. 信仰の蹉跌

この加藤歓一郎の教育論は、県の教育課が高く評価し、加藤は優れた青年教育家として面目を一新することとなった。こうしたなかで急速に加藤は思想的な転換を行っていった。日本精神が称揚される時代のなかで、加藤は『葉隱』や吉田松陰を研究し、周囲からもすすめられて青年教師の指導的地位につくようになった。しかし、加藤はそれが大きな落とし穴であったと後に述懐している。

「これで郡内の教育界でも異端視する者が少なくなった。その上彼の実践力が認められ、青年教師仲間から推されて実践の推進者となつた。所がこれが実は大きな落とし穴でもあった。誘惑は戦の時には少ない。順境こそ最も恐るべき穴である。」「誰も人間が故意に誘惑したのではないが私自身の内に誘惑され罪に引込まれて行くべきものがあったのである。」<sup>14)</sup>

この加藤歓一郎の転向の背景には、当時進行していたキリスト教を中心とする宗教に対する国家統制と弾圧があった。国民精神総動員運動が進み国家総動員体制が確立するなかで、政府は、1939(昭和14)年4月、それまで一部のキリスト者の反対によって成立が阻まれていた宗教団体法を成立させ、宗派の統合と監督強化を実施した。

ところで、この法案を審議した第74回帝国議会の貴衆両院の各特別委員会ではともに、神社と宗教との関係が問題となった。その際政府は、貴族院では「神社は宗教ではない。宗教を超越したものである。神社

崇敬と相容れざる宗教の教義は其の宣布を許さぬ」と説明し、衆議院では「神社は国の宗祀として、総べての国民は報本反始の誠をして之を崇敬し惟神の道を遵奉すべきものである、如何なる宗教の教義と雖もいえども。之に抵触し矛盾することを許さぬ、我が国の法制上に於いて神社は宗教に非ず、神社は宗教団体法の適用の外にある。」と答弁している<sup>15)</sup>。これは政府のいわゆる国家神道の解釈を敷衍したものであったが、この時期、神道を非宗教としてすべての宗教の上位に置き、全国民へ国家神道の強制を徹底する政策はより強化されていた。ことあるごとに児童生徒や青年に教育活動として神社参拝を強制するなかで、学校教員など公的な地位にあるものが神社参拝を拒否することは不可能となっていた。一般国民でさえ神社参拝を拒否した場合は厳しい迫害をうけ治安維持法違反の嫌疑がかけられた。加藤歓一郎はその時の心情を次のように語っている。

「もはや九年時代のような戦は戦えず、神社に跪拝するか教員止めるかの二者択一となつた。ここで教員止めたら徴兵か召集に決まつてゐる。聯隊区司令部と警察の特高はこんなことに目を光らしてゐる。誰相談する者もなく孤独で学校内にこもつてゐた。<sup>16)</sup>」

そこに青年教師の仲間があいよつて会を作ろうという誘いがあつた。加藤は助け舟にも乗る思いでそれに加わりその中心となつた。その会は、出雲南部（雲南地域）の大原・飯石・仁多の各郡から会員を募り、「雲南青年教育者志道会」と名付けた。最初は芦田恵之助の国語教育論などをテーマにしてゐたが、日本の古典や思想を学ぶことに目が向けられ、そうしたなかで、加藤と志道会は、森信三（もりのぶぞう、1896-1992）と出会うことになった。当時日本精神を強調し、満州國に創設さればかりの建国大学で「精神講和」を担当していた森が、1940（昭和15）年1月松江市で講演をしたのがきっかけであった。この講演に共感した加藤は森に私淑するようになり、その後、志道会は森の帰省のたびに大阪などで合宿などをして、森から指導を受けた<sup>17)</sup>。

そうした学習会のなかで特に重点的に取り組まれたのが、当時ベストセラーとなった杉本五郎中佐の『大義』（1938年5月）であったといふ。この書物は加藤に深い感銘を与えた。

『大義』は、第1章天皇の以下のような文言で始まつてゐる。

「天皇は 天照大御神と同一身にましまし、宇宙最高の唯一神、宇宙統治の最高神。（中略）即ち 天皇は絶対にましまし、自己は無なりの自覚に到らしむるもの、諸道諸学の最大使命なり。無なるが故に、宇宙悉く 天皇の顯現にして、（中略）森羅万象 天皇の御姿ならざるはなく、垣根に啣く虫の音も、そよと吹く春の小風も皆 天皇の顯現ならざるなし。釈迦を信じ、「キリスト」を仰ぎ、孔子を尊ぶの迂愚を止めよ。宇宙一神、最高の真理具現者 天皇を仰信せよ。」

これは、たんなる天皇信奉の言葉ではない。天皇制国家体制という枠を超えて、天皇信奉を、天皇を唯一絶対神とする「天皇教」とでもいえる純粹信仰へと昇華させたものであった。この神がかり的な「信仰」のなかに、加藤はキリスト教から距離を置き背教へ向かう自己を救う場を見つけたのではなかろうか。

日本が米国・英國に宣戦布告した直後、彼は、『新約聖書』の「ローマ人への手紙」第9章の冒頭、「わたしはキリストにあって眞実を語る。偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって、わたしにこう証をしている。即ちわたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みがある。 実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。」といふ文言を自分なりに解釈して「キリスト教を敢えて捨てても國に殉ずる決心をした」<sup>18)</sup> といふ。

「曾てのキリスト教に対する私の熱意は憂國の情に変わってきた」、「キリスト教と憂國教育がその位置を置換えて国家主、キリスト教徒という関係になった」と述べている。キリストへの殉教の心情が國のためへの殉教へと置き換えられたのであった。そして加藤は「若し私がキリスト教信仰を知らぬ者ならここまで純

粹に愛国心に生きることは出来なかつたと思う」<sup>19)</sup> とキリスト教信仰から天皇信仰に至つた心情を自己分析している。一神教的な絶対帰依の対象が神から国家へ転換した時、皮肉にも純粹で徹底した天皇信仰が確立する、こうした心性の構造が見えてくるのである。

したがつて愛国教育は「暴力や絶対命令で動かすものではなく」「内心からほと走り出るもので」<sup>20)</sup> なければならぬと徹底させた。彼は、彈圧に屈して節を曲げたのではないこと、時流に迎合した保身でないことを人々に明かさなければならなかつた。そのためには日本精神・日本主義、天皇信仰を徹底して内面化し、自己の本質的行動としていかなければならなかつた。こうしたなかで、「国難は外部よりも国の内部にある、いわゆる昭和維新こそ急務」<sup>21)</sup> と思い詰めるようになった。そして天皇信仰は体制批判の武器として使われた。ついに彼は国政革新を叫ぶ超国家主義者として自己の立ち位置を見出したのであった。

しかしながら、加藤は、後にこの戦時期の蹉跌を深く悔いている。

「キリスト者としての私の一生涯ではこれが再び取り返すことのできない失敗であり、罪であり、神にそむき、イエスを裏切るユダの大罪であり、生涯の恥辱であった。その傷痕は今尚痛い。」<sup>22)</sup>

その精神的痛みとともに、彼は何がそうさせたかを自ら問いかけている。

そして、教育勅語体制の下で「習慣化された国家依存の精神」、国家への奉公の底流にある「立身出世主義」、いいかえれば愛国の美名に隠された「利己的功名心」、こうした「人間の欲望と国家を結びつけた思想」を見抜けなかつたからだと自答している。「国難來ると云えば深層に潜在していた愛国心と功名心が私の心を揺り動かし」<sup>23)</sup>、聖書の言葉をそれに都合がいいように解釈したと後悔の念に苛まれている。

#### 4. 戦時期の超国家主義

加藤歓一郎は、1942（昭和17）年以降、教会から足が遠のき國士気取りで天下国家を論じた。そして1942年度から、仁多郡阿井村立青年学校の校長として青年教育に邁進することとなつた。仁多郡阿井村（現・仁多郡奥出雲町上阿井・下阿井地区）は、出雲たらの鉄師御三家の一つ、県内屈指の山林王・櫻井家の本拠地である。当主は代々三郎右衛門を襲名し、敗戦前後は12代三郎右衛門（1903-1991）が当主であった<sup>24)</sup>。彼は、後に県農協中央会会長や島根日産自動車社長、仁多町長などを歴任した。まさに島根県政財界の大物であった。

櫻井は1934（昭和9）年4月に、安部十二造（1896- 1969：仁多郡阿井村出身）らとともに思想運動団体「山陰素行会」を結成して福岡正樹知事を会長に担いだ。安倍は、阿井村村長の末子であったが、苦勞の末米国ニューヨーク大学留学後、国際電話株式会社の設立などを手がけ、広田弘毅元首相ら当時の政財界人や陽明学者の安岡正篤と親交があり、金鷲学園理事をつとめるなど、いわゆる「革新官僚」のブレーンとして国家主義運動にかかわった。松江市では、戦前から祈月書院を創立して青年教育・育英事業を行うなど社会教育家でもあった<sup>25)</sup>。「山陰素行会」は安岡正篤の思想的流れを汲み、会員は島根県を中心に一時千人ほどを擁した。1936年4月、福岡知事退任に伴い櫻井三郎右衛門が第2代会長となつたが、ちょうどそのころ安部十二造は東京に帰り、以後、櫻井が中心となっている。それ以降、「山陰素行会」は30年以上にわたつて櫻井を会長と仰いでいた<sup>26)</sup>。

1942年度に加藤歓一郎が、阿井青年学校の校長として阿井村に移つたのは、櫻井三郎右衛門の推挙によるものであった。加藤はその前年に「山陰素行会」に入会し、安岡正篤の思想に傾倒し東洋思想の研究に没頭していた。櫻井はこうした加藤歓一郎に故郷の青年教育を委ねたのであった。加藤は、「国難に赴く青年は機械的な軍事技術より精神教育である」<sup>27)</sup> として青年学校に塾制を採用し、早朝、雪の中でみそぎを行い、夜は古典講義や時事問題の学習をした。その一方で、校長自ら率先して労働奉仕を行い、生徒たちとともに

校舎建設を実現した。生徒たちの規律の乱れがあったことから、生徒幹部の特別養成のために集中講座を実施し、それと関連して満蒙開拓青少年義勇軍の送出などにも積極的にかかわっている。後年、加藤が、愛國の美名に隠された「利己的功名心」<sup>28)</sup> として慚愧の念を吐露したのはそうした活動のためであったといえよう。

### 5. 敗戦直後の加藤歓一郎

敗戦の年の6月、加藤歓一郎は40歳という高齢で召集を受け、広島の部隊を経て土佐湾の防備にあたった。そんな折の1945（昭和20）年7月の日記に、「戦友某君は大正十一年兵で最古参なれど若き見習い士官になぐらる。これ皇軍なり。立身出世せざるべけんや？」<sup>29)</sup> とある。「天皇教」に心酔し日本精神を信奉していた加藤であったが、軍隊の卑劣さの背後に人間の「立身出世」欲や利己心があることを厳しく批判している。8月、敗戦直後の将兵の行動を次のように嘆いている。

「国破れて徒に残骸を世に残すより潔よく自尽し果てんと思ひしも他兵も將も意外に平然たり。日がたつに従って聯隊長が米を荷造りして運びしとか某隊長が何を運んだとか醜惡なる話ばかりなり。ああ軍隊とはかかるものなりしか職業軍人とはこれか。」<sup>30)</sup>

そして彼は「血は叫ぶ」と題する33行の詩を書き殴って、9月12日に家族の待つ阿井村に帰った。詩は「日本を亡ぼしたのは日本なんだ」と叫び、「美しき伝統と歴史」をもつ日本をかけがえのない最愛の妻にたとえ、敗戦に臨んでその愛と恋慕を一層深くする熱い思いあふれるものであった<sup>31)</sup>。

加藤歓一郎が帰還する半月ほど前に、阿井青年学校に加藤を訪ねてきた青年があった。彼は、島根師範学校を卒業後1941年度から阿井小学校教員を務め、青年学校でも教えながら加藤の指導を受けていた長谷川文明（当時24歳）であった。加藤は軍隊からまだ阿井に戻っていなかったので、彼は引き返すしかなかつた。しかしその途中で警察に逮捕された。8月24日未明の松江騒擾事件（島根県庁焼き打ち事件）のサブリーダーであったからである<sup>32)</sup>。

この事件は、敗戦直後各地で発生した無条件降伏に反対する騒擾事件の一つで、戦争継続を主張して、松江市で右翼青年たちがクーデターを企てた事件であった。「尊攘同志会」と名のる青年の起こした東京・愛宕山事件に呼応する形で決起したもので、岡崎功を中心とした20歳前後の男女数10人が「皇國義勇軍」を名乗って武装蜂起し、各隊員が分担して県内の主要施設を襲撃した。まず島根県庁が焼き討ちされ、新聞社・発電所もその機能を一部破壊された。事前の計画では、知事・検事正の暗殺も企図されていたが、足並みが揃わず失敗した<sup>33)</sup>。

長谷川文明は1945年3月に教職を辞し宮司見習となっていたが、影山正治（1910-1979；1933年神兵隊事件で検挙、1936年「維新寮」を結成、1939年これを大東塾と改め塾長となった。歌道や記紀の研究家）の大東塾系の短歌の会を主宰していた<sup>34)</sup>。おそらく大東塾傘下の「新国学協会」（前身は「短歌維新の会」）に関連する組織ではないかと思われる。ところで大東塾の資料の中に、「新国学協会」の島根県出雲支部の支部長に加藤歓一郎の名前が見える<sup>35)</sup>。このことから加藤と長谷川は「新国学協会」の関係で影山正治の思想の影響を受けていたと推測される。「新国学協会」は、保田與重郎、浅野晃、倉田百三、三浦義一、尾崎士郎、林房雄らが同人として参加し、日本主義思想にもとづく歌道の普及をめざしていた<sup>36)</sup>。大東塾は、1945年8月25日に東京・代々木原で影山正平塾長代行（正治の父、正治は応召中で加わられなかった）をはじめ14人が代々木練兵場で古式に則り集団割腹自刃を遂げる事件を起こした<sup>37)</sup>。これも無条件降伏に反対しての行動であった。

こうした状況のなかで加藤歓一郎は思想的苦悩を深めていた。後援者であった櫻井三郎右衛門を始め「山

陰素行会」の幹部は公職追放にあい、加藤にも追放の危険が迫っていた。しかし、友人たちの支援に加え、キリスト教信仰を理由に幸い追放は免れた。阿井村では、櫻井の追放もあり政治状況が混乱するなか、加藤は、青年学校を青年たちの学習会や読書会・政治講座として復活させ、玉川学園の小原國芳を講演のため阿井へ招いた。また、荒廃した皇居の清掃活動のため、交通の困難な時期に生徒を引率して上京するなど、加藤は青年学校生徒や青年団関係者に大きな影響を与え続けた。<sup>38)</sup> そうしたなかから青年たちによる村内産業の自主経営計画などが提案され、一時、新村長を当選させるなど、青年層を中心とする村内民主化運動が活発に展開された<sup>39)</sup>。

## 6. 第二の回心

1947（昭和22）年2月11日、東京大学では総長・南原繁の講話が行われた。当時はまだ旧憲法下であり当日は紀元節に当たっていた。南原は「式典は行なわない」という学内の大勢に反して、「進んで式典を行なうことを学部長と相談して」、「当日、日の丸の旗を正門に高々と掲げ、あえて盛大に」全学的演説を行った。その演説内容は、新聞を通じて報道され大きな社会的反響を呼んだ。加藤歓一郎はこの内容に強く感動した。紀元節の演説は「新日本文化の創造—紀元節における演述ー」と題して活字になっているが、それを見ると、同年の年頭の「天皇の人間宣言」を西欧の宗教改革に対応させ、戦後改革をルネッサンスに比肩させ、日本においては今こそヨーロッパの「レフォーメイション」に匹敵する「人間の自由」の確立が必要なことを説いている。そして、その内面の深奥に「超主観的なる絶対精神」がなければならないと論じている。

「凡そ人は人間性をいかに広く深く豊醇に生き得たとしても、それだけでは真に人格個性の自覚に到達することは不可能と考へなければならぬ。それには必ずや人間主觀の内面を更に突詰め、そこに横はる自己自身の矛盾を意識し、ここに人間を超えた超主観的なる絶対精神—『神の発見』と、それによる自己克服がなされなければならない。（中略）かような人は、真に自由の人であって、自己自らを不斷に創造すると共に、人間と国民の改造、ひいては人類の改善の可能を疑はず、真に人類愛のために献身的努力を為す力を与へられるであらう。今澎湃として興りつつある自由主義或は民主政思想も、その発現の当初に於ては、これらの宗教的動因なくして決して起り得たものではない。」<sup>41)</sup>

ただし「新日本文化の創造と道義国家日本の建設」という理念は、南原のこの論脈では、天皇制と固く結びついていた。南原は、戦後の新日本建設の意義は、基本的に「わが建国の神話と歴史に盛られた意味」と一致するものであると断言し、その理想の実現に向けて、「われらの遠き祖先の懷抱した理想を思ひ、殊に身躬ら衆に先んじて昭和維新の精神的革命の範となり給うた皇室を戴き、古き伝統に新しき精神を接木して、我が民族の眞の永遠性と世界における神的使命を見出し、一致團結して新たな『国生み』—新日本の建設と新日本文化の創造に向かつて、堅き決心を以て邁進しようではないか。」<sup>42)</sup> と高い調子で呼びかけている。「神の発見」を軸とした国民個々人の精神的自由と、民族的・国家的な統合と発展を結び付けた主張は、南原繁の政治哲学の基本から発したものであったと同時に、敗戦と占領という国家的危機に臨んで、彼の高度な政治的配慮を示すものであった。この演説は当時多方面にわたって反響があり、思想的な影響を与えたが、加藤歓一郎にとっては、ことのほか深い感動をもって理解されることとなった。

その少し前、阿井の加藤のもとに思想的挫折をかかえた失意の森信三が訪ねてきた。1946年10月のことである。森は10日ほど加藤と親密に腹蔵なく話し込み、自己のこれから学びの道標を、マルキシズムとキリスト教に置くことを吐露した。キリスト教については内村鑑三の思想の意味を語って聞かせた<sup>43)</sup>。加藤もちょうど内村鑑三の重要性を再発見しつつあった時期であった。そうしたなかで、彼はついに内村鑑三に導かれ無教会派キリスト教へ入っていくこととなった。加藤はその時の心情を、次のように語っている。

「唯一絶対の神様以外には何者をも恐れないこれが眞の自由である。かくの如き独立の自由人が育ち、かかる人間を構成要素としてのみ民主的な平和国家は成立しそる。経済に非ず・権力に非ず・名誉や地位に非ず、ただ良心の命令を至上命令として生きる人間、これを目指して教育する。」「(前略) 私は教師になって初めて神のため、国のために、隣人のため、と、この三つの目的が完全に一致して來た。こんなすっきりした考で実践出来るのは初めてだ。」<sup>44)</sup>

こんな澆淵とした気持ちの中で、加藤歓一郎は大原郡日登村から新制中学校校長として迎えられ、新設早々の中学校経営を任せられた。加藤は42歳になっていた。

## 7. 戦後教育と加藤歓一郎

加藤は、生徒を「紳士として待遇」しその「良心」を信じた。彼の言葉でいうところの「待つ教育」を実践したのであった。「良心の命令を至上命令として生きる人間」「独立の自由人」を育てるためであった。当初は、生徒の非行や、父兄の批判、教職員の不満などで必ずしもうまくいかなかつた。しかし彼はそれを神の与えた試練ととらえた。そして「教育とは待つことである」という悟りにも似た境地に達した<sup>45)</sup>。

そうしたなかで1951(昭和26)年1月、無着成恭の『山びこ学校』が出版され教育界をにぎわせた、加藤歓一郎はこの教育実践の意義を即座に感じ取り、同年10月、東北地方の視察を兼ね山形県・山元中学校の無着のもとを訪ねた。彼はその視察を機に、農村こそ本物の教育ができるとの信念のもと、『山びこ学校』を超える教育実践を目指した。開校当初から取り組んできた農業や畜産を主体とする生産教育を地域産業の考察と計画にまで本格化させ、それと生活綴方教育を結合させ、さらに卒業後の青年教育(公民館での中学校専修科・青年学級という形で)にまで延長させて自らの信じる教育を展開させた。そして、産業教育の文部省指定校(1952年)を受け、そんななかで取り組まれた文集『ひのぼりの子』の作文が全国的に注目されるようになった。そして加藤歓一郎の教育実践は「山陰のやまびこ学校」「日登教育」として有名になった。

ところが1958年3月、加藤歓一郎は突然53歳で退職を決意した。加藤の退職はいろいろとりざたされたが、その背景には教育の国家統制の強化があった。退職を決した理由を彼は次のように記している。

「昭和三十一年教育委員の公選が推薦制になり、完全に教育権は独立を失って行政の下に入り教科書の検定制度が定り、学校長の管理職が決定し遂に教員の勤務評定が実施されることになりました。ここに至って私は決断すべき時となりました。今日まで自由に自分の責任に於て自由に全力を傾向して教育実践してきた事、更にこの勤務評定及校管理職制に反対してきた事この二つの事に対して反対が決定実施されるならば私の教育もこれで終り、とここで退職を決したのである。」<sup>46)</sup>

この結果、加藤歓一郎はその後の20年間ほどを、学校から離れ新生活運動など社会教育指導に挺身し、村を担う多くの青年の育成にあたった。また無教会派キリスト者として伝道しながら幾多の弟子を育て、ついに1977(昭和52)年3月15日に他界した。

このように加藤歓一郎の人生は、その信仰と思想において曲折し、悔恨と苦惱に満ちたものであった。その苦難と葛藤は、決して世俗的なものではなく、真摯に人間と社会の本質に向かい合おうとする純粹さからもたらされたものであった。それでは、自己の内的な矛盾や葛藤に苦しみながらも徹底してひたむきに理想を追求した彼の生きかたは、いかにして形成されたのであろうか。その秘密は、加藤が自ら「第一の回心」と呼ぶ青年期の思想的経験にあると思われる。以下で、加藤歓一郎の青春とそこにおける思想的葛藤を見てみよう。

## II. 加藤歓一郎の青春－葛藤と回心

### 1. 師範学校入学

加藤歓一郎は1905（明治38）年5月16日、日露戦争開戦後、島根県大原郡加茂村（現・雲南市加茂町）の加藤常之助の第一子・長男として生まれた。小さな農家であったが古着屋と貸家を営み、当時一般からすると貧しいわけではなかった。彼は家族から愛情をもって育てられたが、彼が11歳のおり、実母が4人の子を産んすぐに亡くなつた。そして翌年継母を迎える、次々と兄弟が増えるなかで、歓一郎の中学校への進学は立ち消えとなつてしまつた。そんななかで学業に集中できず、「最後の高等科三学年の時など半分も学校に出席したかどうか」<sup>47)</sup> という状態であった。

加藤は高等小学校卒業後家事を手伝つていたが、自ら思い立つて松江市にある島根県師範学校入学をめざした。教員になることを目指したというより、師範学校には月10円の県費支給と、入学試験の成績が郡内上位3人までの者に、郡の学費補助があつたためである。このころ第一次大戦後の物価高騰により教員希望者は減少し、師範学校の入学倍率も大幅に低下していた。島根県でも、師範学校生の生活費や学費のための県費支給額を大幅に増加させて、なんとかして志願者を増やそうとしていた時期であった<sup>48)</sup>。そんななか、彼は集中的に受験勉強をして首尾よく合格した。加藤歓一郎17歳の春であった。しかしながら「一ヶ年間は希望に燃えて勉強した。ところが二年生になるとぐれ出した」<sup>49)</sup> という。どうしたのであろうか。

### 2. 松江高等学校

加藤歓一郎は当時を回想して、その心境を次のように描写している。

「松江に始めて高等学校が出来たのが大正十年。これとともにこの地方都市にも新しい時代の空気が流れ込んで来た。高等学校の生徒は師範学校の生徒と年令はそうちがわないので、それなのに彼らは堂々とカフェーに入りタバコはのむ。藩風堂々と街頭を闊歩する。これに対して師範学校は軍隊式の全員寄宿舎制度でスパルタ式。かつては青年のあこがれであったのが、今はまるで牢獄のように思われる。」<sup>50)</sup>

1920年代以降、狭い松江市に、感受性豊かな青年期の生徒たちを擁する師範学校と高等学校が並立していたのである。両者は繁華街や書店などで否応なく近づかなければならないこともある。お互い意識せざるを得ない。そうしたときにエリート然として自由にふるまう高校生に対して、師範学校生はつい卑屈になり、劣等感を感じざるをえなかつた。

松江高等学校は、1918（大正7）年9月に成立した立憲政友会・原敬内閣による高等教育機関拡張計画によって設置された、いわゆる「地名校」（「ネームスクール」）と呼ばれる一群の旧制高等学校の一つである。この時の高等教育機関設置の方針として地域格差是正という方針があり、地名校の高等学校は大都市部や太平洋側を避け日本海側や四国に設置された。松江は幕藩時代有数の城下町とはいへ、当時人口は4万人に過ぎなかつた。先に高等農林学校を鳥取に奪われた松江市民にとって、全国17番目の松江高等学校（1920年創立）の設置は大きな誇りであった。

校地は松江市に隣接する八束郡川津村（現・松江市西川津町）で、松江市内といつてもいい場所であった。1921（大正10）年5月18日の開校式は、派手な電飾で飾り立て学童3,400人の旗行列を実施するなど、喜びに沸いたのは学校関係者よりもむしろ住民たちであった<sup>51)</sup>。同年5月26日、松江高等学校の生徒がおりから松江に来ていた第六高等学校生徒と合流し、総勢340名で県警察の交通取り締まり方針に反対して交番を襲撃する事件を起こした。その際も市民の多くは警察より高校生に味方したといわれている<sup>52)</sup>。また、創立まもない松江高等学校の学生には、社会主義思想の影響を受ける者が次々と出て、社会問題研究会など

を組織し、同会は寮や校友会などの自治組織の指導的立場に立つなど学生運動も盛んであった<sup>52)</sup>。

ところで、旧制高等学校は地域バランスを考えて設置されてはいたが、それぞれの地域に根差した教育が行われたわけではない。帝国大学の予科としてのカリキュラムは基本的に共通しており、生徒や教員は、ナンバー・スクール、地名校、7年制という類型の違いにかかわらず「共属感情」<sup>53)</sup>をもっていたといわれている。出身地域を見ても、大正期の松江高等学校の島根県出身者は20%程度である<sup>54)</sup>。旧制高等学校の特質は地域性ではなくその階層性にあったといえるのである。1910年から1942年までの第一高等学校の入学者を調査した資料から、生徒の親の職業構成を調べた竹内洋の研究によると、生徒の親は「官吏・会社員・銀行員などのホワイトカラーと専門職の新中間階級で約半数（四六パーセント）を占めている。専門職は医師や弁護士などの富裕層が多い。」ということである。そして「小学校教師などの貧しい半専門職は専門職全体の三パーセントでしかない」<sup>55)</sup>という。当時の松江高等学校生徒の調査ではないので割り引いて考える必要があるが、松江高校も多かれ少なかれそうした傾向を持っていたといえよう。

### 3. 師範学校生の苦悩

加藤は当時の師範学校について、「糞真面目に勉強して卒業した者は小学校教師、一生涯鼻たれ小僧の相手に過ぎない、こんな気持ちが校風をなしていた。」<sup>56)</sup>と自嘲気味に回顧している。ところで高校と師範との彼我の違いは社会的・経済的格差、そして立身出世の道筋の違いにとどまらなかった。感受性に富む加藤の眼には、その格差は教養の違い、文化的格差として焼き付いたのであった。「自由を求め、平等を求め、思想に目覚める。これを待つかの如く」<sup>57)</sup>書店には、トルストイやマルクス、ドストエフスキーやイプセンが並んでいた。こうした教養は、高等学校生徒は当然の教養として享受していた。しかし師範学校では、むしろ害悪をおよぼすものとみなされた。

こんななかで加藤は、「これが師範生の悩みであった。県費国費で養われている籠鳥に過ぎない。我らの前途は、小学教員という限られた範囲から一步も出ない」<sup>58)</sup>と、国や県に従属して一生を送る自己の将来を嘆かざるを得なかった。一方、師範学校の教師は、「高等師範に入るものがえらい、卒業したら中等教員の試験に合格した者がえらい、早く校長になり、視学になった人がえらい」<sup>59)</sup>と立身出世主義を吹き込むばかりで、「小学校教員の誇りについて、意義について、情熱を傾けて語ってくれる教師」<sup>60)</sup>はいなかつた。こうした悶々とした心境のなかで加藤歓一郎は授業に身が入らず一年間に二度の停学処分を受けた。

### 4. 本間俊平の講演

劣等感のなかで自暴自棄に陥っていた加藤を救ったのは本間俊平であった。本間俊平（1873-1948）は、新潟県に生まれ大工となったが、1897（明治30）年、東京靈南坂教会で留岡幸助から洗礼を受け、1902（明治35）年から、山口県美祢郡秋吉村で大理石採掘所を営みながら、社会事業家・キリスト教伝道者として一生を送った。秋吉台の大理石採掘場では、共同生活を送りながら身よりのない若者たちの育成に携わるなど「秋吉台の聖者」と呼ばれた。山口県の主要産業の一つである大理石産業を興した一人としても知られ、玉川学園の小原國芳とも親交をもち、興亜工業大学（現・千葉工業大学）の創立に参加している<sup>61)</sup>。

その本間俊平が歯科医・四方文吉の仲介で、田中龍夫とともに松江市で講演を行ったのが1924（大正13）年11月22日であった。加藤歓一郎はこの日、「倫理や教育の教師から推薦されたことも手伝って、平素不真面目な加藤も何かひかれるもの」<sup>62)</sup>を感じてこの講演会に出席したという。公演は22日・23日の両日にわたって、一般向け、中等学校生徒向け、女学生・婦人会向け、キリスト教信者向けの4本からなっていた。加藤が聞いたのは「信ぜよ」と題する11月22日の中等学校男子生徒向けの講演であった。

加藤はこの講演を聞いて、「人間には頭の働きのほかに信ずるという言う大きな働きがある。」「ここに一つの可能性が残っている、という希望。」<sup>63)</sup>と、目が開かれたことを回想している。彼は、神のような存在を信じ、そこへ自らの目を向けるようになったのであった。この講演録は四方文吉が出版しているが、それによるとその講演には以下のようない節がある。

「昔の人は『それ信仰は望む所を確信し、見ぬ物を真実とするなり』と言つて居ます。(中略) 吉の偉大な事をした人は皆此様な信仰の基礎に立つて居ります。之が彼等の力の源、生命の源であると見たのであります。我々は裏に神を見出さねばなりません。」<sup>64)</sup>

本間は、内面に神への信仰をもつことによって自立した人生を送ることができたのである。そしてつづけて、性欲や情念について以下のように語っている。「之を神のどんな旨であるかを善く考えねばなりません。これを考へない者は性欲の奴隸となつて神を見出すことはできません。之を進めて行き偉大なるものを産み出さねばなりません。世界の政治も、経済も、宗教も、教育もこの情念によって発達したのであります。此情念、人を恋ふ情念となつて居るものから、私共は神の姿を造り行く様にせねばなりません。」<sup>65)</sup>

また本間は、この講演のなかで、ある師範学校で、退学処分にした3人の生徒を校長・教頭・教員の各自が預かることを決めたが、いざとなつたら各家庭の都合を理由に教師はだれも預かることを辞退したという体験談をまじえて、たてまえに流れる師範学校教育を批判している。このことも加藤歓一郎の心を揺さぶった。

この講演を聞き終えて、加藤歓一郎は「神は愛である。」「神は愛なりと信じて、愛に生きることこそ教育の根本」<sup>66)</sup>であると悟ることになる。彼は「私は知的に弱い、記憶力がない、思考力も弱い、然し、人間には今一つ信ずるといふことがある。これは学校では教えてくれないが、たしかにある。私はこの神を信じようと決心した」<sup>67)</sup>と述べている。そして「神の愛を信じ人を愛することが人生第一義である」と、キリスト教信仰の立場に至ることとなったのである。その結果、加藤は「高等学校何者ぞ、大学何者ぞ、身の師範生たることを神の与え給うた最高の栄誉、使命と喜ぶようになった」<sup>68)</sup>と述懐している。彼の「第一の回心」が始まったのであった。

## 5. 第一の回心

本間俊平の講演をきっかけとして、加藤歓一郎は四方文吉のもとを足しげくおとづれた。そして師範学校卒業までの1年半、毎週土曜日午後に四方家で指導を受けることになった。四方文吉はクリスチヤンではなかったが、禁酒禁煙を身上とし社会改良運動に熱心であった。歯科医の傍ら本を出版したり文化人を招いたりして、大正から昭和にかけての松江における文化サロンのパトロンであった。本間俊平をはじめ山室軍平、河合信水、波多野鶴吉、中村春二、三浦修吾、小原國芳など一流の文化人が、四方の家に入りしていた<sup>70)</sup>。そうしたなかで、加藤は山室の『平民の福音』(1899)、三浦の『学校教師論』(1917)、小原の『教育の根本問題としての宗教』(1919)を読み、信仰と教育を結び付けた生き方に強く影響を受けた。また、イプセンの戯曲『ブランド』の正義と真実のためには妥協しない生き方に感銘を受け、座右の書として卒業後の短期現役入隊にも持参している。

加藤は信仰が確立することによって、学校の教科をはじめすべての学びが主体的なものになった。「それ以来学課が面白くなった。」「更に深く勉強するために本を求め、ないものは探し、他校の図書館まで借りにいった」<sup>71)</sup>と回想している。自己の「精神世界に新しい秩序」が立ったことにより、「なすべきこと、なすべからざることが外部からの手本や強制でなく内なる神の命令に従うこと」になり、「学問が、職業が、生活が各々その位置を定めた」<sup>72)</sup>のであったと、加藤は述べている。

加藤歓一郎は1924(大正13)年の12月のある朝、寄宿舎裏の空き地に穴を掘って、たばこや酒、娯楽

雑誌を放り込んで焼却した。回心の儀式であった。加藤は山室軍平『平民の福音』の記述をまねて、その炎の前で神にそれまでの行いを懺悔して悔い改めた。立会人は寄宿舎の下級生 10 数人であった。翌年から彼は一変し、寄宿舎の便所掃除を続けたり、生活物資を孤児院に送ったり、退学をいいわたされた友人の保証人になったりした。その反面、寄宿舎や学級の部長や役員は断って「人の一番後に従って、他人のいやがることを引受けける」<sup>73)</sup> ことに努めた。

加藤は 1925 (大正 14) 年 3 月に島根県師範学校を卒業し、規則により短期現役兵制度によって 5 か月間歩兵第 63 連隊 (松江) に入隊し、9 月から小学校教員として赴任した。内心は「県下で最も貧しい村、不便で人の好まない地」<sup>74)</sup> を希望していたが、彼の任地は郷里の隣村・屋裏村の尋常高等小学校であった。加藤歓一郎はペスタロッチになったつもりで子どもたちの前に立った。

## まとめ

加藤歓一郎の思想と実践について、彼の信仰と思想の展開に焦点を当てながら考察してきた。加藤の人生の歩みは、大正期から戦後高度成長期にいたる間の、地域に根差し地域に生きた教師の精神史であった。そのまま日本近現代教育史の歩みともいえる。そのなかで私たちが教訓とすべき事柄はたくさんあるが、筆者は以下の二つの点が重要であると考える。一つは、心の奥底から青年の思想と行動を振り動かす教育の必要性である。加藤歓一郎は、キリスト教をはじめとする様々な思想を学ぶことによって、人間や社会の内部に「神」を見出し自己の使命を自覚した。そのような生きる指針となるものを育てる教育の必要性である。今日、旧制の高等学校と師範学校というような複線的関係はなくなり中等教育も高等教育も大衆化されているが、「信仰」にも似た人生の指針、学びの核となるもの、ある種の哲学を育てることは忘れ去られている。

加藤は、若き日に「学問には学校の教課のように文学・理科・数学とある外にこれらの学問の根本である哲学という学問がある。これは一切の根本真理の学問である（中略）このむずかしい哲学のその又根本に宗教というものがある」ということを、学校外の学びで知ることができたと回想し、「人生を真剣に探求しようとと思うと」おのづからこうした「若い日の自分の内面」<sup>75)</sup> が思い出されてくると述べている。そして「コンプレックスに襲われて挫折感に打ちひしがれ」た青春の日々を回顧して、「この悩みが人生に於て貴いのであり、得がたい」、「この悩みの中から真の人生が生まれて来ると言いたい」、「この試練なくしては真の人生はわからぬ」<sup>76)</sup> と述べている。

さまざまな師や読書から智慧と勇気をえて自分なりの「信」を得るところへ行きつく、ただしそれはまた壊され失うかも知れない、しかし次にはより根深く勁い「信」をつくり上げる。加藤歓一郎の生涯はこんなことの重要性を教えているような気がする。現代、そんな青年の精神の奥底によりそうような教育は等閑に付されているといわざるをえない。

第二の課題は、教師の教育の自由という問題である。師範学校の教育は教師として巣立っていく加藤歓一郎の誇りをくじくものであった。彼は国や県の指示に従い立身出世をめざす教師の在り方に自暴自棄になつた。しかし、加藤を救つたのはキリスト教信仰を通じて神を発見し、良心に従うことを知つたことであった。良心にしたがうことによって、精神の自立を自覚し、教師として自己の尊厳を保つことができたのであった。

そんな加藤にとっては、教育への統制はなにより教師の良心の自由、自己の尊厳に対する侵害であった。良心を見つめその使命感にもとづいて教育にあたる自律的な教師の活動を根底から否定することにほかならなかった。したがって、教師の教育の自由が制限されればされるほど、教師の良心は枯れて、教育はます

ます皮相な功利的なものとなってしまう。勤務評定が強行され教職を辞すに至った加藤歓一郎の心には、そんな思いが渦巻いていたのであろう。余生を社会教育と伝道に捧げたのは、残された人生、自己の良心を大切に守っていきたいという加藤の最後の思いからであったのであろう。

今、教員不足が問題となり教員給与の増額などが議論されているが、精神性の高い優秀な若者を教職に引き入れるには、教師の労働条件整備とともに何よりも教育の自由が必要だといえるではなかろうか。

## 引用文献

- 1) 2) 小原國芳編『日本新教育百年史』第7巻（中国・四国）、p.124、中沼郁執筆、1970年。
- 3) 4) 森信三「代表的戦後教育人の系譜」『森信三全集』第14巻、実践社、1965年、p.342。
- 5) 櫻井重康「加藤歓一郎の教育と『新しい村づくり』」同志社大学人文科学研究所編『社会科学』45巻4号、2016年2月。同「加藤歓一郎の『日登教育』：『新しい村づくり』と産業開発の構想」前掲『社会科学』48巻1号、2018年5月。同『『山陰の山びこ学校』と加藤歓一郎』同志社大学人文科学研究所編『戦後日本の地方を生きる』（人文研ブックレット・第93回公開講演会）所収、2019年3月、などがある。加藤歓一郎の生活改善に関する教育実践については、本井雄太郎「戦後地域社会における教育実践と生活改善－島根県大原郡日登村を対象として－」日本史研究会編『日本史研究』587号、2011年7月がある。
- 6) 7) 『日本キリスト教歴史大辞典』1988年、教文社、p.303、この項藤原道夫執筆。
- 8) 加藤歓一郎・藤原道夫著『奥出雲の地の塩－雲南キリスト教史物語』山陰文化シリーズ45、今井書店、1973年、p.182。
- 9) 10) 同上書 p.183-184。
- 11) 「私の学級経営・日登村西日登尋常小学校加藤訓導、昭和9年10月」p.2。加藤歓一郎顕彰資料室所蔵の複写による。島根県教育庁総務課編『島根県近代教育史』第2巻、通史編・大正昭和、p.845-846に一部所載。
- 12) 「昭和十年六月 地域社会教育思想より見たる 学級経営の中心問題 西日登尋常高等小学校 加藤訓導」p.2-3。加藤歓一郎顕彰資料室所蔵。
- 13) 同上書 p.4-6。
- 14) 前掲『奥出雲の地の塩』p.184。
- 15) 根本松男『宗教団体法論』巖松堂書店、1941年、p.13-15。
- 16) 加藤歓一郎『雲南の灯』西村書店、1974年、p.271。
- 17) 福原宣明『魂の点火者－奥出雲の加藤歓一郎先生』1994年、報光社 p.206-210。この部分福原の関係者からの聞き取りによる。
- 18) 前掲『雲南の灯』p.273-274。
- 19) 20) 同上書 p.272。
- 21) 同上書 p.274。
- 22) 23) 同上書 p.273。
- 24) 若槻福義「櫻井三郎右衛門論」若槻『新島根の群像』1957年、島根民報社、p.9-12。
- 25) 柳浦章「安倍十二造先生をしのぶ」全国師友協会編『師と友』1970年1月による。
- 26) 素行会会長・櫻井三郎右衛門編『素行会五十年の歩み』素行会発行、1988年による。
- 27) 前掲『雲南の灯』p.274。
- 28) 同上書 p.273。
- 29) 同上書 p.276。
- 30) 31) 同上書 p.277。
- 32) 福原宣明『魂の点火者』pp.206-210。この部分福原の関係者からの聞き取りによる。
- 33) 島根県警察史編さん委員会編『島根県警察史』島根県警察本部、1984年、pp.771-777。
- 34) 猪瀬直樹『天皇の影法師』朝日新聞社、1983年による。
- 35) 影山正治編『大東塾三十年史』大東塾出版部、1972年、p.1049。

- 36) 同上書 p.95。36) 同上書 p.95・1030。
- 37) 同上書 p.884-891 の「十四士自決事件」。
- 38) 藤原正夫「加藤歓一郎先生と私」「飛鳥」編集委員会編『飛鳥－加藤歓一郎追憶集』加藤きみ子発行、1979年、pp.191-198。須山武「加藤歓一郎先生との思いで」藤原正夫編著『高宕が丘』2001年 p.81-82。藤原為一「宮城清掃奉仕」大正昭和の体験を綴る会編『大正昭和に生きて』1996年、p.205、など。
- 39) 野津聰子「阿井村革命前夜」溝上泰子・野津聰子編著『くらしをひらくもの－山陰の生活をとおして』今井書店、1967年、p.122-123。
- 40) 南原繁著述・丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』東京大学出版会、1989年、p.145。
- 41) 南原繁『祖国を興すもの』帝国大学新聞社出版部、1947年2月10日発行、p.8。
- 42) 同上書 p.23。
- 43) 前掲『雲南の灯』p.294。
- 44) 同上書 p.295。
- 45) 同上書 p.299。
- 46) 加藤歓一郎「荒野」84号1976年1月、p.451。「<sup>あれの</sup>荒野」は加藤の個人紙で加藤が土曜会・日登聖研塾の名で1964年8月から77年4月まで2・3か月に1回発行していた。加藤の死後1977年9月に、日登聖研塾が合本を作成している。引用はこれに依った。
- 47) 前掲『奥出雲の地の塩』p.112。
- 48) 前掲『島根県近代教育史』第2巻 pp.459-462。
- 49) 50) 前掲『奥出雲の地の塩』p.113。
- 51) 朝日新聞社松江支局編『旧制松高物語』今井書店、1968年、p.19。
- 52) 松尾壽「松江高等学校」島根大学開学三十周年史編集委員会編『島根大学史』島根大学、1981年、pp.159-160。
- 53) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折-日本の近代12』中央公論新社、1999年、p.140。
- 54) 前掲『島根大学史』p.144。
- 55) 前掲『学歴貴族の栄光と挫折』p.176。
- 56) 前掲「荒野」87号、1976年5月、p.462。
- 57) 前掲『奥出雲の地の塩』p.113。
- 58) 同上書 p.114。
- 59) 「自叙伝的証言」前掲「荒野」56号、1973年5月、p.281。
- 60) 前掲『奥出雲の地の塩』p.114。
- 61) 三吉明『本間俊平の生涯』福音館書店、1966年など。
- 62) 前掲『奥出雲の地の塩』p.114。
- 63) 四方文吉『山陰の聖戦・本間先生と田中博士』1926年、pp.128-129。
- 64) 65) 同上書 p.129。
- 66) 前掲『奥出雲の地の塩』p.116。
- 67) 68) 「自叙伝的証言」前掲「荒野」56号 p.281。
- 69) 「若き友へ（二）」前掲「荒野」87号、1976年5月、p.464。
- 70) 四方文吉『欽仰録』1937年などによる。
- 71) 72) 「自叙伝的証言」前掲「荒野」56号 p.282。
- 73) 前掲『奥出雲の地の塩』p.118。
- 74) 同上書 pp.120-121。
- 75) 「自伝的証言」前掲「荒野」56号 p.281。
- 76) 「若き友へ（二）」同上書 87号 p.462。